四方田犬彦 | 書物の灰燼に抗して

――比較文学論集

定価――本体2600円+税
ISBN978-4-87502-437-8 C0095 ¥2600E

工作舎

映像、文学を中心に、アジア論、音楽、美術、漫画、料理などを対象に健筆を振るう批評家の初の比較文学論集。

❖タルコフスキーの映画に導かれて、現代文学における「ノスタルジア」の森を逍遥する「1――帰郷の苦悶」。
❖カフカの裔として、「死」を創造行為の主題としてきた美術家、映画監督、演出家たちを巡る「2――死の領分」。
❖「耳なし芳一」の物語を通して、アルトーの寸断された肉体の主題に迫る「3――変容する琵琶法師」。
❖詩人としてのパゾリーニを素描し、映画『ソドムの市』に込められたバウンドの詩の意味を明かす「4――パゾリーニ、封印を解く」。
❖映画とエクリチュールの間を自在に往還した作家たちの足跡を眺望する「5――怒りと響き」。
❖ル・クレジオが「砂漠」をめぐって書き記してきた物質的恍惚の魅力を辿る「6――泉と同じ数だけの聖者」。
❖歴史を記憶し記録する者としてのホメロスを改訂した文学的試みを分析する「7――黒いホメロス、ホメロスの不在」。
❖文化と呼ばれる自然への先鋭的な批評行為である「エッセー」の方法論に光をあてる「8――書物の灰燼に抗して」。

アンドレイ・タルコフスキー
エスラ・パウンド
ライナー・ヴェルナー・ファスビンダー
タデウシュ・カントル
アンディ・ウォーホル
ピーター・グリナウェイ
アンセルム・キーファ
フランツ・カフカ
ラフカディオ・ハーン
アントナン・アルトー
ピエル・パオロ・パゾリーニ
ウィリアム・フォークナー
マルグリット・デュラス
センベーヌ・ウスマン
ホメロス
デレク・ウォルコット
マフムード・ダルウィーシュ
テオドール・アドルノ

全8篇からなる批評の星【コンステラシオン】座。

❖あるとき図書館=書斎が突然に焼け崩れて灰燼に帰す。
だが書架の深奥に棲み、神聖なる黄金虫のように
書物を読み続けては書き続けてきた者たちにとって、
それはたかだか地上世界における偶禍にすぎない。
燃え崩れた次の瞬間から図書館は、
たちどころに記憶のなかの想像上の図書館へと変貌し、
視力を喪失した瞬間から眼は記憶の幻視のために再起動をはじめる。
だがもう一方に亡命者の一群がいることを忘れてはならない。
古色蒼然とした図書館からも、
莫大な蔵書を誇る書斎からも、無惨に放擲された者たち。
彼らは世界を世界の深い傷として認識することから、
エクリチュールに参入する。
もし現実が破綻を来たしてしまったとすれば、
彼らはそれを補填するのではなく、
逆にあえて突き破ることにしか思考の根拠を
置こうとしない。

◉

1――帰郷の苦悶
2――死の領分
3――変容する琵琶法師
4――パゾリーニ、封印を解く
5――怒りと響き
6――泉と同じ数だけの聖者
7――黒いホメロス、ホメロスの不在
8――書物の灰燼に抗して

四方田犬彦 | 書物の灰燼に抗して――比較文学論集

工作舎 文学批評

エッセーとは
文化と呼ばれる自然への
『もっとも先鋭的な
批評行為と
なりうるだろう。

エッセーとは
文化と呼ばれる自然への
もっとも先鋭的な
批評行為と
なりうるだろう。

❖大学院で比較文学を学び、
スウィフトの空想旅行記をめぐる
学位論文を提出したというのに、
わたしは長い間、この本来の専攻である分野について書いた
論文エッセーの類を纏めることに怠惰であった。
❖読者がここに手にされるのは、
脱線と逸脱を重ねた著者が
この20年の間に執筆してきた、
比較文学についての紙である。

e = goichiro ishihara + chie kuzuu / d = azusa miyagi + chihiro sato